

意味への問い

日本を離れて久しぶりに静かな日々を過ごしながら、わたしは一昨年のことを時々振り返ってみることがあります。昨年の今頃、わたしは宮崎の学校の教壇に立っていました。学期末試験も近づくころ、野球部の応援に汗を流していました。グラウンドに立つ球児たちの姿は、教室で見せる表情と全く違い、きりりと引き締まり頼もしく見えたことを覚えています。

もしシスターになることがなかったら、わたしは決して教壇に立つことはなかったでしょう。わたしは小さなころから集団行動が苦手な、学校というシステムの中でどうしてよいかわからず、戸惑うことが多かった子どもでした。というのは、物事の意味を問わずにいられなかったわたしにとって、学校とは意味を説明してくれる以前に、常にすでに物事が始まってしまうところだったのです。



わたしはみんなが同じように体を動かさなければならない体操というものに戸惑い、自動的に暗記しなければならなかった掛け算というものに戸惑い、テストというものの意味に戸惑いました。外面的にはそう見えなかったかもしれませんが、学校に適應することが難しい子どもでした。今でも、教室で途方に暮れて、石のように固くなっていた子どもの頃の自分を思い出します。

そのような学校生活の中でも、成長するにつれわたしは少しずつ学んでいきました。意味がわからなくても、やってみること。その中で見えてくるものがあること。すべてがわからなくてもいいのだということ。けれどもその一方で、わたしは一方的に押し付けられる現実を前に、小さいながら憤りも感じていました。どうして誰も意味の説明をしてくれないのかと、言葉にならないもどかしさを抱いていました。

大人になった今も、わからないことが多い自分を見出します。そんなわたしが、生徒の前に立ち、教えなければならないことが怖い時もあります。一方で、子どもの頃、先生は何もかも全部知っているのだと思っていましたが、本当はそうではないのだと分りました。そしてまた他方では、当たり前のように聞こえますが、よく教えるためには、自分がその物事の意味を真に理解していなければ不可能なのだということにも気が付きました。教育の道は、教師にとっても一生をかけて追及してゆく生き方なのかもしれません。

学校で生徒たちに接する中で、「どうしてこんなことせんといかんの」「めんどくさい」という声を多く聞きました。その言葉の裏に、わたしは意味への探求があるように思えてなりません。わたしたち人間は、根本的に意味を求めずにはいられないのでしょうか。勉強することの意味、この教科の意味、学校生活の意味、そして何よりも生きることの意味……。意味を問うことは、決して理屈っぽくなることではありません。物事の意味を問い、それらの価値がおぼろげながらも見え始めた時、わたしたちは初めて自分の前に置かれた現実に対して、真に責任を持って取り組めるようになれるのかもしれません。

ローマにて

Sr 岸里実

